

# 映画『プリズン・サークル』鑑賞後の エンカウンター・グループの意義

○今井結雅・藤原陽央・押江隆  
(山口大学教育学部心理学選修)

## 本研究の目的

映画『プリズン・サークル』は刑務所である島根あさひ社会復帰促進センターにて実施されている更生プログラム「Therapeutic Community(以下"TC"と表記)」に関するドキュメンタリーである(坂上, 2022)。TCではエンカウンター・グループ(以下"EG"と表記)が取り入れられている(Broekaert et al., 2004)。この度配給会社から許可を得て本作品を上映し、観客参加のEGを実施する機会を得た。本研究では映画鑑賞後に実施したEGの意義について検討することを目的とする。

## 方法

**予備調査** 受刑者印象尺度の作成を目的に、29の形容詞対によるSD法を実施した。調査協力者は111名(平均年齢19.5歳( $SD = 2.2$ 歳)); 男性55名, 女性55名, その他1名)であった。これらの項目に対して主因子法・Oblimin回転による探索的因子分析を行った。平行分析及び因子の解釈可能性から、3因子構造が妥当であると判断した。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Oblimin回転による因子分析を行い、十分な因子負荷量を示さない項目や複数の因子に高い負荷を示す項目を除外しながら、繰り返し因子分析を行った。その結果、3因子17項目の因子分析結果が得られた。第1因子に「外向性( $\alpha = .72$ )」、第2因子に「一貫性( $\alpha = .72$ )」、第3因子に「親近感( $\alpha = .63$ )」と命名した。

**本調査** 上映会には18名(平均年齢46.5歳( $SD$

= 13.6歳); 男性7名, 女性11名)が参加した。上映前・上映直後・EG後にそれぞれ受刑者印象尺度に回答してもらった。またEG後に、上映会全体の感想を自由記述にて求めた。有効回答数は16名であった。

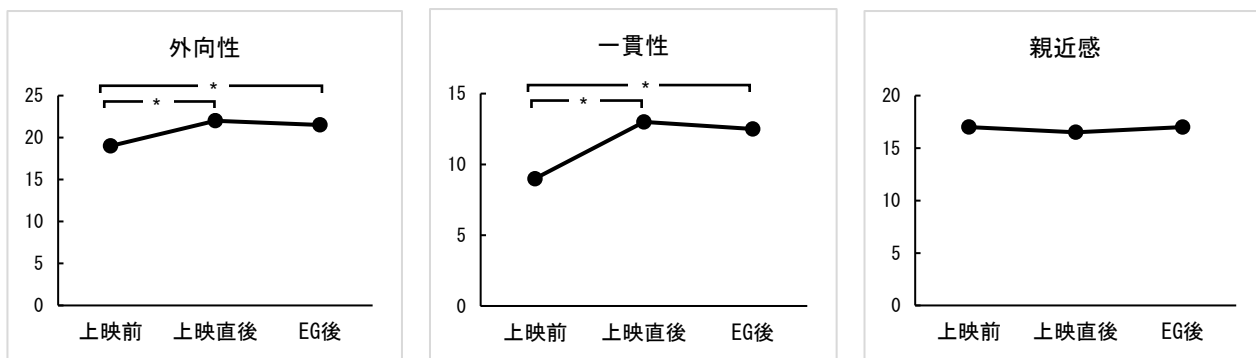
## 結果

受刑者印象尺度の各下位尺度得点についてFriedman検定を実施したところ、「一貫性」と「外向性」について有意な差がみられた( $p = .012, \eta^2 = .27$ ;  $p = .005, \eta^2 = .32$ )。Bonferroniの方法により多重比較を行ったところ、「一貫性」と「外向性」両方について上映前と上映直後およびEG後に有意な差がみられた(Figure 1)。

## 考察

本研究の結果から、EGの実施による受刑者印象尺度の下位尺度得点の有意な変化はみられなかった。この点について、今回の映画鑑賞後のEGでは受刑者についてよりも更生プログラムの意義や実現可能性の話題が多かったことが理由として考えられる。また、上映会全体の感想には、「ひとりでは見逃しているところをEGの時に他の人の発言から知ることができた」「話し合うことで現実とのおりあい考えた」などの声があった。このことから、EGは印象を変化させる場ではなく、多角的な視点を取り入れることで自らの考えを深めることができる場であると考えられる。

今後の課題として、参加者自身の受刑者に対する向き合い方を調査することが挙げられる。



\*  $p < .05$

Figure 1. 受刑者印象尺度の下位尺度得点(中央値)の推移